



代々続く
本格的なきもの
の提案。

— あなたのきものを誂える —

願い

■ 昨年、暮振袖を下見にまわれ、この王朝美の彩色と上品なはんり感に魅了されたので、関西の本格的な様式美です。

■ そしてこの振袖には写真のように訪問着の袖も後付けられるように細工もあり且つ古風で釣



一番自分らしくなる「きもの」と出逢えたとても喜んでいただきました。



全ての想いを物語る1枚のコーディネート。黒地の本袋帯は当店のオリジナル。一本ずつ全ての配色を変えて織ることができます。お問い合わせ下さい。

想い

■ 創作ルーツは、関西の旧家に暮らしていた個人蔵(河津登喜太夫人所蔵)の友禅染中振袖。細雪の映画衣装で表現出来なかった若菜色に地色を変えて再デビューさせました。日本の染織文化が最も輝いた大正から昭和初期の感性を再現したく、京都の昔気質の老舗屋に創作してもらった作品。

■ きものは出来上がった製品からだけでなく、柄も色も自由に自分なりに変更し、創作出来る事をぜひ知って下さい。だからと言って高くなります。代々続く本格的なきものを提案しております。

■ 八月には古典柄の別荘で、同地色の振袖兼袖訪問着が染め上がり、参ります。お楽しみに。

創作

目指す道はただひとつ 製造型きもの小売業。
市場にない製品は、自ら創る。

■ 着物に日常着だった時代、きもの選びや創作は最先端のファッションだ。違くない。呉服屋はお客様のよりお似合いなきものを創り、難題な要望に応えるべく自由な誂えを行っていた。それが信用と信頼を育んでいた。

■ しかし現在、小売店での誂えや創作はほとんどなくなりつつある。理由は、市場で生産された製品のみで対応する方が手取り早いから。つまり、メーカー主導で創られた中からの着物

■ 選びが、現代の主流になりつつある。お客様の要望や店の意志はどかに消えたのか？

■ 「創作と直し再生の合体」

■ きものやを支えているのは、創作や誂えに依って来る頑固な老舗屋や、創作老舗向屋の存在。いずれも当店の難題な要望にこたえてくれている良パートナーだ。

■ 今までの経験と人脈を生かし、誂えができる創れる直せる、きものに精通した専門店であり続けた。



当時のファッション誌
木版刷り「衣装雛形」

西洋における「洋服」を選ぶとは、形のことを指し、「きもの」を選ぶとは「柄と色」のことを指していた。

江戸時代の呉服屋には、たくさん現品やイメージを眺らまされるための「衣装雛形」(今で言うファッション誌&染めのイメージ帳)として彩色や地色選びのための色見本帳が多く揃えられ「誂え」が日常的に行われていた。洋装と違っても、柄と地色に限定されていたから、比較的スムーズに「誂え」が可能だったのかも知れない。(小袖時代から「形」が大きく変わらなかったから)

「衣装雛形」が登場してから誂えが容易になり、全国に広まっていった。

洋装はアクセントとしての装飾(宝飾)が開花したのに対し、日本の「きもの」は、明治の頃から西陣を中心に、欧州の技術が取り入れられ、技術改革の中から素晴らしい織り染め等の工芸帯が生まれることとなる。この帯との共生が、きもの独自の文化を築いていく。

今もなお形を変えない「きもの」柄と色というシンプルながら奥深い「きもの選び」。これからも日本の文化を支えて行くに違いない。(店主 川内 俊秀)



京正謹製 中振袖 兼 袖別誂え訪問着

- 二十歳の成人式を経て数年後、友人や知人の結婚式にもこの振袖で出席。そして、いずれ結婚された後 この振袖は、訪問着の袖に長じゅばんごと付け替えます。● 取り外した袖は、未だ見ぬ未来の子どもへときっと受け継がれて行くでしょう。
- 京正さんの作風は、宮内庁御用達としてもご愛用されています。時を超えて変化することのない衣装美です。

商品というものは、もちろん売れるということが最終の条件ではあるけれども、その売れるものをどうすれば自分の心まで満たしてくれるか、働くものが一生懸命になれるかということが大事だと思いますね。これを作ればきっと買ってくれる、おれのやっている部分は、よそのものよりいいんだとか、そういう誇りというのがあると思うんです。誇りがなくなったら、これはもう製品としてはゼロね。(本田宗一郎)

誇りを持って、あなたのきものを、を誂える。(店主 川内 俊秀)



この地で共に生きる 暮らす・・・

（営業時間）きものや AM10:00-PM6:00
雑貨屋 AM10:00-PM6:00
■ 定休日 毎週水曜日

Tel. 0197-64-5595 株式会社 上 庵
〒024-0072 北上市北鬼柳20の51の10

着物あれこれ相談処

きものや 雑貨屋 ZAKKAYA

注 裏面も あります。

「きもの」を楽しむ夏。

新緑を経て、夏の装いの季節となった。「きもの」と「器」は、旬を楽しむと言う。6月の初夏は「単衣」。7・8月の盛夏は「絹・紗・麻」。9月の初秋は、再び「単衣」となる。

きものには色々なルールも多く、面倒で離れてしまう方や、大好きな方でも時に迷うことも多い。時代や価値観に照らし合わせて自分でルールを破ってもいいと思う。基本ルールは守り、あえて「破る勇氣」は周りにも受け入れられるはず。

格式を重んじるフォーマルの席以外なら、夏のきものに常識的な「自分流」を持ち込む。心にゆとりを持ち、きものを楽しんでもらいたいと思っている。自分流の始まりは、浴衣姿での外出が多くなる「夏」からだと思はう。

海外に羽ばたこうとする日本の若者の多くが、日本らしい文化を学ぼうとする。外国人から、心の奥底に息づく何かを問われるケースがあるからだ。その中でも多いのが「きもの」。日本の美意識と感性は、外国人にとって「クール」なのだ。

(店主 川内俊秀)



生綿地に太鯨小紋と織九寸夏名古屋帯



明石ちぢみ (着尺)

本場琉球びんがた
九寸夏染名古屋帯 (宮城 里子作)



縞ちりめんにぬれ描き草花染九寸夏名古屋帯 ウサギ帯留め (水牛製)

「目的」をどう持つかで 生き方は大きく変わる。

有名な訓話「3人のレンガ積み」

中世のある町の建築現場で3人の男がレンガを積んでいた。そこを通りかかった人が、男たちに「何をしているのか？」と尋ねた。

1人目の男は「レンガを積んでいる」と言った。

2人目の男は「食うために働いているのだ」と言った。

3人目の男は「後世に残る町の大聖堂を造っているんだ！」と答えた。

この時、3人の男たちにとっての「目標」は共通である。一日に何個のレンガを積むとか、工期までに自分の担当箇所を仕上げるといったことである。

1人目の男は、目的を持っていない。

2人目の男は、生活費を稼ぐのが目的である。

3人目の男は、歴史の一部に自分が関わり、世の役に立つことが目的となっている。

3人のその後を想像するに、1人目の男は、違う建築現場で相変わらずレンガを積んでいた。

2人目の男は、今度はレンガ積みではなく、木材切りの現場で「カネを稼ぐためには何でもやるさ」と言っていて、ギリを手にして働いていた。

そして3人目の男は、その真摯な働きぶりから町役場に職を得て、「今、水道計画を練っている。あの山に水道橋を造って、町が水で困らないようにしたい！」と言って働いていた。



こもれびにて

人は目的を持ってものを見ると、目的を持たないでものを見るのでは、百八十度違ってくる。専門家というのは目的をもって、ものを見ている人のことをいう。(本田宗一郎)

きもの専門家として日々研鑽。(店主 川内 俊秀)



きものやもつひとの機能 再生加工への念い。

再生加工への念い。

「この辺りの色は抑えてください」といったお客様の要望は「どの程度なのか？」判断しづらい。お互いの好みのニュアンスは違う。だから限度ラインを確認し合い、さらにお客様の想定を超える感動のプランを提案することが本場のプロ。

染め・創作・治しの エキスパート 悉皆屋。

江戸時代、大阪で衣服・布帛の染色・染返しなどを請け負い、これを京都に送って調製させる業とした者。転じて染物や洗い張りをする店。

浮かぶ程に、専門用語・色番・ラフ草稿、そして念いを込め埋め尽くしている。

広辞苑によると、「悉皆屋」とは、江戸時代、大阪で衣服・布帛の染色・染返しなどを請け負い、これを京都に送って調製させる業とした者。転じて染物や洗い張りをする店。



加工前

加工後

再生



仕上がり

<予告>

きものや創業 28年目の誕生祭。

ドキドキの内容…
当店お宝 大放出！
商品お買い上げ大特典
「お買い物券」…進呈??

まもなく開催！
乞うご期待！

とある。「悉皆」とは、みな。残らず。ことごとく。…とある。

要は、染め物に関して、創る・治す・染め替え…全てのエキスパートなのだ。現在、創作の詠え工房は京都が中心。数は少なくなつたが、未だに、店からの要望に応えようと、する仲間が頑張ってくれている。

学んだ「悉皆」は当店の基本。

22歳の時、縁あってきもの業界へ入り 営業店で修行を積んだ。商品製作担当になった27歳、「自店による創作販売」を目指す社長の元、私は創作の基本を「悉皆屋」で学ぶこととなる。小売店が商品制作を行うには、全ての工程がわかる人材養成と、「悉皆屋のプロ」にさせる必要があったのだ。その後、毎月一週間は京都で過ごし、本格的に糸目友禅、引き染、シミ抜き等、きもの創作の最前線で詠えを10年間学んだ。

当時、まだ若造だった私に「悉皆業」のほぼすべてをご教示くださった野尻周吉氏。現在も東京で悉皆屋を続けられている。そして京都の竹田正一氏。共に、今もなお私の師匠として当店の悉皆を大きく支えてもらっている。



お父さんは逃亡者？

●27年前、37歳だった私は、家族や実家の反対を押し切り、永年の夢「独立・開業」のため、この地にて商いを旗揚げした。開店準備に翻弄し、まだ幼かった3人の我が子に親らしいことは何もせず、身勝手な父親だったと反省する。

●当時、長女、朋友は小学3年生。私が「脱サラしてこの商いを始めた」とお客様に話しているのを聞き、どこで覚え、どう間違ったのか「脱サラ」を「サラ金」と解釈し「東京から借金取りが押し寄せてくる」と心配をされていたらしい。

●今や3人の子どもたちは、妻やその実家に助けられ成長し、それぞれ母となった。長女は、高校時代から店の仕事に精通し、

現在「雑貨屋」の店長を務めている。夕方に帰ると言ってしまうのは、身勝手だった父親の、せめてもの「罪滅ぼし」なのかもしれない。



創業した頃、娘3人とカミさんで夏の三陸へ、長女の胸の奥はきっとタイトルの文字がよぎっていた!